

聖書に見られる集合体の祈り

導入

弟子の祈りから、私たちは祈るべき模範を学びました。では、教会生活の中でどのようにそれを実践すればよいのでしょうか。聖書から、ここ OIC の交わりの中でともに祈ることについて、どんなことが学べるのでしょうか。

使徒の働きから学ぶのがよいでしょう。

使徒1：12-26を読みましょう。

1:12 そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあつて、安息日の道のりほどの距離であつた。1:13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであつた。1:14 この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。1:15 そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、ペテロはその中に立ってこう言った。1:16 「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかつたのです。1:17 ユダは私たちの仲間として数えられており、この務めを受けていました。1:18 (ところがこの男は、不正なことをして得た報酬で地所を手に入れたが、まっさかさまに落ち、からだは真っ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった。1:19 このことが、エルサレムの住民全部に知れて、その地所は彼らの国語でアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになった。) 1:20 実は詩篇には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』1:21 ですから、主イエスが私たちといっしょに生活された間、1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」1:23 そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。1:24 そして、こう祈つた。「すべての人の心を知っておられる主よ。1:25 この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示してください。ユダは自分のところへ行くために脱落して行きましたから。」1:26 そしてふたりのためにくじを引くと、くじはマッテヤに当たつたので、彼は十一人の使徒たちに加えられた。

使徒の働きで、皆が集まる祈禱会について最初に記されているのは、使徒：12-14です。

ルカ24：49にあるイエスの教えに従い、弟子たちは神の聖霊が注がれるのをエルサレムで待っていました。この期間に、弟子たちは屋上の大広間に集まり、数日にわたって祈禱会を開きました。

ここには120名が集つたとありますから、きっと広い部屋だったのでしょう（使徒1：15）。

弟子たちには、決めなければならない重要案件がありました。イエスを裏切つたユダの代わりになる人を選ばなければなりません。同時に彼らは、神の聖霊が注がれるのを待っていました。

ここでまず、この個所の内容から教会という集合体における一致の祈りについて学べることは、ふたつの理由でそのような祈りが「不可欠」だったということです。

まず、信徒の中に、そして信徒をとおして神の聖霊が注がれるのを望むなら、祈りが不可欠です。次に、教会で指導者の責任を務める人を選ぶという重要な決断をくだす前にも、祈りが不可欠です。

ヨハネの福音書16：8は、聖霊のおもな働きは人々に罪と義と裁きについて認めさせることだと語りま

ヨハネ16：8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。

ですから、イエスの望まれるように聖霊に働いていただきたいと望むなら、教会全体が定期的に集まり、教会において、そして大阪の町において聖霊が働かれるように祈る必要があります。

けれども、多くの人は「忙しすぎて祈れない」と言います。

先日私は、忙しくて祈れないとどんなことが起こるかをうまく表現した話を読みました。

アメリカでの出来事です。ある男性が車を運転していると、路肩に止まっている車に気付きました。その車のボンネットは開いていました。男性が車を止めて話を聞くと、その車はガス欠になったとのことでした。男性は非常用にガソリンを車に積んでいたもので、その車の運転手に少し分けてあげました。そして、もう少し先のスタンドで満タンにしたほうがいいですよ、とアドバイスして、その場を去りました。

すると30kmほど行ったところに、先ほどガソリンを分けてあげた車がボンネットを開けた状態でまた路肩に止まっています。運転手は決まり悪そうにそこに立っていました。そうです。彼は急いでいたのでスタンドに寄ってガソリンを入れるひまがなかったのです。先ほど助けに止まった男性も、今回は助けることができないと、そのまま走り去りました。

そんな状況でガソリンスタンドに寄らないような愚かな人がいるのかと思うでしょう。けれども、忙しすぎて、教会が一体となって集まって祈るのに参加できないと言うなら、ガソリンがないのにそのまま走り続けた運転手と同じです。私たちは、集合体としての祈りの必要性を真摯に受け止めなければなりません。さもないと、教会は力を失い、神が望まれる形で機能できなくなります。

集合体としての一致の祈りの手始めとして、礼拝やスモールグループで祈る心構えが必要です。それは、聖書が教えるようなかたちで聖霊に働いていただくためです。つまり、罪と神の義を人に認めさせることです。

今日はメッセージの後で、皆さんにご起立いただき、主の祈りを英語と日本語でともに祈りたいと思います。その後、立ったままで私が祈り、続いて皆さんに一斉に祈っていただきたいと思います。

声を出して祈っても、心の中で祈っても結構です。声を出して祈るのをお勧めしますが、もしできなければ心の中で祈ってください。

今回は、5分間だけこのような時間を取りますが、今後神の導きに従って、時間を延ばすこともあります。

私たちが教会で一体となって祈るなら、神の働きが驚くほど目に見えるかたちでなされるでしょう。まず神は、他の人を変える前に私たち自身を変えられるかもしれません。それはそれでよいのです。そうなったら、神に従いましょう。

では、使徒で次に教会がそろって祈った事例を見ていきましょう。

使徒2：40-47を読みましょう。

2:40 ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。 2:41 そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。 2:42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。 2:43 そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議とするしが行われた。 2:44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。 2:45 そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。 2:46 そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、 2:47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

屋上の部屋での祈祷会の結果、マッテヤがユダの変わりに選ばれました。また、聖霊が注がれ、約3,000人の人が救われました。

ここで、この祈祷会が教会の日常の一部であったことがわかります。

42節で、ルカは定冠詞を用いることで、礼拝で口ずさまれた特定の祈りを示しました。

使徒3：1では、ペテロとヨハネが午後3時の祈りの時間に祈るために宮に行ったとあります。タルムードによると、ユダヤ人は一日3回宮で祈りを捧げます。早朝、午後、そして日暮れです。祭司がいけにえをささげるときに、ユダヤ人は祈りました。

初代教会の中心に、集合体としての祈りがあったようです。

このように祈りを積み重ねることで、初代教会の神に対する意識は高かったと言えるでしょう。43節には、一同の心に恐れが生じたとあります。これは、神に対する健全な恐れです。

聖霊があらゆる状況で力をもって働かれると、神に対する健全な恐れが起こります。それは、驚きと畏敬の念です。

1949-1952年にスコットランドで起こったルイス島のリバイバルで、神は説教者ダンカン・キャンベルを用いられました。当時、彼はフェイスミッション聖書学校の学長でした。私は1985-1987年に、この聖書学校に通わせていただきました。学長の奥さんは、ルイス島のリバイバルでクリスチャンになったそうです。

奥さんは、リバイバルの力が再び起こってルイス島だけでなくスコットランド全体に及ぶようにという重荷を持っておられました。ご主人の故コリン・ペッカム師も同じ重荷を強く持っておられたので、私も真のリバイバルについて多少知っています。

ダンカン・キャンベルはルイス島のリバイバルについてこのように言いました。「神が降りて来られると、地域全体で多くの人が神の恐れにとらえられた。」

リバイバルの力をもって聖霊がやって来られたら、私たちも神の恐れにとらえられるでしょう。それが、リバイバルの証のひとつです。

人々の祈りなしに、この世でリバイバルは起こりません。

もしかすると神は、祈りの人々として私たちを用いてくださるのではないのでしょうか。

使徒2：43は、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われたとも語ります。

私がぜひこの目で見たい最大の不思議としるしは、人々が「新しく生まれる」ことです。人々の人生が永遠に変えられることです。これこそ何よりも偉大な奇跡です。

使徒に見られる一致の祈りは、「証する大胆さ」を求める祈りです。

周囲の人たちにイエスについて証するのがむずかしいと感じる人が多いようです。ですから、この個所は皆さんのためになるみことばかもしれません。

使徒4：13-37を読みましょう。

4:13 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。4:14 そればかりでなく、いやされた人がふたりと一しょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。4:15 彼らはふたりに議会から退場するように命じ、そして互いに協議した。4:16 彼らは言った。「あの人たちをどうしよう。あの人たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全部に知れ渡っているから、われわれはそれを否定できない。4:17 しかし、これ以上民の間に広がらないために、今後だれにもこの名によって語ってはならないと、彼らをきびしく戒めよう。」4:18 そこで彼ら呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。4:19 ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断して

ください。4:20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」
4:21 そこで、彼らはふたりをさらにおどしたうえで、釈放した。それはみなのが、この出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。4:22 この奇蹟によっていやされた男は四十歳余りであった。4:23 釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。4:24 これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。4:25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。4:26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』4:27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、4:28 あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行いました。4:29 主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。4:30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください。」4:31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。4:32 信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。4:33 使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みとそのすべての者の上にあった。4:34 彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、4:35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。4:36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、4:37 畑を持っていたので、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

ペテロとヨハネが祈るために宮に行く途中で、門のところで足の不自由な人と出会いました。この男性はお金を恵んでくださいと求めました。ペテロはこの男性にこう答えます。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」そして、その男性の右手を取って立たせると、男性の足とくるぶしが強くなりました。宮にいた人全員が、その男性が癒されたことを知り、驚いて神をたたえました。

ペテロはこの機会を活かして、人々に語ります。約5,000人の人がその話を聞いて信じました。ペテロとヨハネは、イエスの復活を信じなかった宮の守衛長やサドカイ人たちによって捕えられ、一晚留置されました。

足の不自由な人が癒された奇蹟が事実であり、そのことを喜ぶ多くの人々がいたこともあって、ふたりは翌日釈放されました。

4:23で、ふたりは仲間のところに帰って、そこで皆といっしょに祈ったことがわかります。24節では、全員がそろって詩篇2篇を引用して祈ったようです。

この個所からわかるのは、この一致の祈りのテーマです。イエスを証するのが困難なときに、神のみことばを信頼できるように、また敵であるサタンからの攻撃があっても大胆な証を続けられるようにという祈りです。

私たち OIC にも教会という集合体として一致した祈りが必要である理由がここにはっきりと示されています。私たちは、イエスについて、福音のメッセージについて大胆に証しなければなりません。

日本は霊的にとてもたいへんな場所です。日本では、天が送ってくださったリバイバルが起こったことは一度もありません。信仰の拠点は神道や仏教にあります。その上、多くの人々は長時間労働を強いられています。午前8時から午後10時といったことも珍しくありません。

ですから、職場の人たちに証する大胆さは、私たち OIC の人々にとってとても大事です。後ほど心を合わせて祈るときに、このことについても祈る必要があります。

人々が一致の祈りをささげた結果が31節に示されています。彼らが祈るために集まっていた場所が揺り動かされ、人々は聖霊に満たされました。

神は彼らの祈りに応えてくださったので、人々は神のことばを「大胆に」語り始めました。

私たちも、日本の職場で大胆にイエスを伝えたいなら、心をひとつにして祈り、イエスを証する大胆さを求めなければなりません。

聖霊の力によって大胆にイエスに仕えようと、そこには必ず抵抗が起こります。

天から送られた偉大なリバイバルは世界中で起こっていますが、そこには必ず抵抗がありました。驚いたことに、その働きが聖霊からのものであると認識していないクリスチャンから抵抗が起こることもあります。大胆さを求めて祈りましょう。同時に、抵抗があることも覚えておきましょう。

最後に、使徒12：1-17を読みましょう。

これが今日の最後の個所となります。教会全体でささげる一致した祈りを支持する意味で、使徒12：1-17の出来事を検証しましょう。

12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。12:3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。12:4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。12:6 ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。12:7 すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。12:8 そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい」と言った。12:9 そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。12:10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりで開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。12:11 そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」12:12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。12:13 彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が対応に出て来た。12:14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。12:15 彼らは、「あなたは気が狂っているのだ」と言ったが、彼女はほんとうだと言い張った。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。12:16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。12:17 しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言って、ほかの所へ出て行った。

この個所では、深刻な問題が起こっていました。ヘロデ王がヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺したのです。さらに、ペテロが捕えられて投獄されました。

人々はあきらめて逃げたでしょうか。そんなことはありません。では、何をしたでしょうか。

5節には、教会はペテロのために神に祈り続けたとあります。

その祈祷会が何日続いたかわかりませんが、少なくとも3日間、もしかすると一週間だったかもしれません。確かなことは、一時間ほどで終わる祈祷会ではなかったことです。

原語のギリシャ語で使われた単語を調べてみると、日本語で「祈り続けた」と訳された部分のギリシャ語は、祈りが途切れることなく続けられたことをとくに強調しています。

また、人々が熱心に祈ったこともあらわします。つまり、彼らはいい加減に祈っていたのではなく、必死で祈っていたのです。

これは、サムエル第一2章に登場するハンナの祈りのようです。ハンナは子どもがどうしても欲しかったので、必死で祈りました。

ですからここで見られるのは、絶望的な状況における命がけの手段です。

この世の中は、絶望的な状態にあると思います。世界中で起こるあらゆる悪事は、NHKのニュースで報じられることはありません。私たちの知らないところで起こっていても、そのような悪事が起こっていることには変わりはありません。今日の世界でもっとも迫害されているのはクリスチャンです。このような状況には、命がけでささげる必死の祈りが必要です。

また、一億人以上の日本人のたましいがイエスと出会わずに永遠に失われようとしています。それを思うと、日本人のために一致の祈りをしなくてはという思いが湧きませんか。福音を日本人に届けようと働いている宣教師のために祈ろうという気になりませんか。

皆さんがそういう思いを持ってくださることを願います。今日皆さんには、日本のために、そしてイエスを必要とする多くの人々のために祈る機会があります。

今日は、使徒の働きから、教会全体がひとつとなって祈るよう励ましてくれる箇所を4カ所のみ抜粋して学びました。旧約聖書にも新約聖書にももっとたくさんの箇所が同じことを語ります。今、皆さんが私とともに祈りたいと思ってくださっていることを望みます。

まず私が短く祈ります。その後、全員で主の祈りを英語、日本語で祈りましょう。主の祈りはスライドに表示されます。

主の祈りの後、その場でご起立いただいたままで祈りの時間を続けます。立ったままの姿勢がたいへんな方はどうぞお座りください。心をひとつにして神に祈りをささげましょう。声に出して祈っても、心の中で祈ってもかまいません。隣の人のことは気にせず、あなた自身の祈りを神にささげること集中してください。

皆さんがそれぞれ重荷に思っておられることに加え、心をひとつにして次の3つのことを祈りましょう。

1. 聖霊が私たちの上に、そして大阪の上に注がれるように。そして、聖霊がすべての人に罪を示し、イエスによる義の必要性を感じさせるように。身近な人の名前を挙げて祈りましょう。
2. 何をするにしても、職場や日常生活を送る場所でイエスを証する大胆さが与えられるように。
3. 日本のリバイバルのために。リバイバルについてよくわからない方のために、今後、リバイバルについての本を用意します。神のなさる御業のすばらしさに皆さんもきっと喜ばれると思います。リバイバルは、神の民が祈るまで起こらないことを覚えておきましょう。